

2005年1月15日 発行

2005年 冬号

<第3号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 E-mail: union@h9.dion.ne.jp

私の生活

私は、五十三歳の独身です。今、グループホームの生活では、話し相手に女友達がいいます。休みが一緒の時は、おともしてくれれます。だけど、自分だけの休みの時は退屈ですね。出来れば休みごとに余暇活動に参加したいですが、自分の思うような活動がないので、困ったものです。

この頃、昆虫のカメムシに、はまっています。臭いはくさいのですが、キレイな種がいるので、捕まえて飼ってみたい気持ちになります。幼少の頃、富田林の山に向いて、クワガタを捕まえてきて箱に入れていたら全部逃げてしまったことを覚えています。また、近所の人からクワガタをもらったり、子どもの頃は、昆虫の楽園でした。

仕事は、疲れを我慢して一日何とかやっています。

藤田 昌義

清掃のプロを目指して

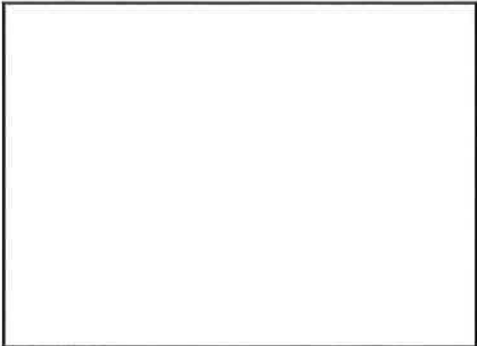
ワークス翔^{かける}は今

「ワークス翔」は、二〇〇二年十月一日に清掃作業を中心に請け負うグループとして始まりまし
 現在の利用者は、男女合わせて計十名、職員二名で作業をしています。就業時間は午前七時から午後三時と、午前九時から午後五時までの二種類です。
 清掃場所は、午前中に市立西成スポーツセンターで、午後は、大正区と港区のマンションをおこなっています。またその他には、梅田の(株)日立ビルシステム関西支社と早朝の大阪市中央区役所や市立西屋内プールの清掃も引き受けています。

「翔」の仕事は日替わりで、一日の中でも午前・午後と場所が変わるため、毎目様々な人と出会います。中でも、多くの利用客とすれ違う「西成スポーツセンター」では、目々色々な「ふれあい」があります。
 『パン!』と音がなつたその先に、興奮した彼女がいました。お客さんが通るため、自分の思い通りに作業ができないことへの憤りが、用具を床に投げつけるという行為になるのです。う。時にはお客さんを近づかせまいとモップを勢いよく動かして、「通れませぬ!」とアピールします。いったん落ち着くために作業の手を止めようとすると、「やりたい、やる!」と強く訴えます。やる気と負けん気が強い故の行動かもしれませぬ。しかし、地域で働くためには、周りとのつながりを大切にしなければいけません。
 そんなやり取りを数回繰り返すうちに、近頃ではお客さんとはち合わせた時、スツと後ろへ身を引く彼女の姿を見かけるようになりました。人と接し、「仕事」とい

いう、時には思惑通りにいかない世界で、新たな自分を創りはじめていのでしょうか。

また、皆にとつて、センターの職員さんやお客さんからの「頑張つてね!」、「いつもキレイにしてくれてありがとう。」などの声かけが、大きな励みになっているようです。心のふれあいがあるからこそ、それに応える努力が生まれるのかもしれない。



「日立ビルメンテナン

の作業です。一人が代表でおもむく作業前後の挨拶では、緊張でしばしば言葉を忘れます。しかし、自分の意欲と感謝を伝え、いつもとは違った面持ちで作業に取り組みます。
 そんな緊張感も、「慣れ」に変わってしまうことがあります。ながら作業が自立つようになつた彼女に、「一人でできないようだったら職員が手伝いましょうか?」と、声をかけました。すると、思いがけない言葉が返ってきました。「私は就職を目指しているから大丈夫!」。そう言つて普段のおぼつかない足取りを軽快なものに変え、オフィス内に進んで行つたのです。それからの彼女は、今までは気にしていた終了時間も気にせず、作業に集中するようになりまし。今の自分の作業では、「仕事」になつていないということを知つたのでしょうか。

個人の変化に伴つて、集

団での変化も見られるようになりまし。すこし前までは、作業分担を本人達にまかせてみると、皆自分のしたいことを好きなように言うだけでした。清掃はそれぞれ担当場に散つての作業のため、皆で一つになつて一つのことをするという意識が薄れがちになります。それでもかみあわない会話が続く日々を経て、少しずつ「どうする?」、「あんた何したい?」という相手の想いを意識する言葉が、皆の中で出てくるようになりまし。決して上手くは進みませんが、時に思わず微笑ましくなるような会話が聞こえてきます。

一見変わらないように見える彼らの日常ですが、そこには、かけがえのない確かな変化が存在します。その小さな変化を大切に、見逃さないように、これからも彼らを支えていきたいと思ひます。

(野々村・山崎)

ユニオンの始まり (三)

二十人のグループホーム

ワークスユニオンは、企業就労が難しくなった人たちのために、企業の中に彼らの独自の「働く場」を備える一方で、地域生活が難しくなった人たちのために、従来のグループホームとは異なる、彼らの独自の「暮らす場」を備えました。

「ワークスユニオンはどうか。先に号して始まったのか」。先の号までは、就労場(授産施設)の

「ワークスユニオンはどうか。先に号して始まったのか」。先の号までは、就労場(授産施設)の

「ワークスユニオンはどうか。先に号して始まったのか」。先の号までは、就労場(授産施設)の

「ワークスユニオンはどうか。先に号して始まったのか」。先の号までは、就労場(授産施設)の

させることが難しかったために、夜間や休日等の援助が乏しく、多くの生活場面で利用者自身の自助努力が求められる程度にまで下がっています。そのために、ある程度自己管理能力と財政力が無ければ、生活を続けるのは難しいのが実状です。

それと比べて、ワークスユニオンの場合は、2LDKのマンションに二人が個室をもちて居住し、大小取り混ぜた数戸の住宅が、一棟の大きなマンションの建物に寄り集まってできています。

隣近所には、多くの一般家族が生活しているし、看板も無いところは「普通の家」と言えるでしょうが、町の中に散在しているわけではあり

加えて、同じマンションの最上階をすべて専有し、そこに事務所と援助を多く必要とする利用者や短期の利用者の居室を置いて、職員が三六五日二十四時間、援助の出来る態勢で待機していま

利用者、内線一本で何時でも何処からでも職員と

連絡が取れる手はずです。この体制が可能なのは、多数のグループホームを一つ所に集中させて、更に数名の専従の世話人(職員)を共有させているからです。いわば施設に似たグループホームの集合体です。

もちろん、施設のような管理や統制は全くありません。利用者たちは、常に守られた体制の中にあっても、別個の自分の場所と時間割で、自分の自由な生活を楽しんでいます。

地域の自立生活が難しくなった人たちは、どこへ行けばよいのか。―断念して家庭に戻るか、現状では施設へ入るほかはありません。

前述したように、ワークスユニオンの生活者の多くは、かつては地域に散在し、その人なりの自立生活を送っていた人たちでした。しかし年月を経て体が弱り、また心が挫け、一人の暮らしが次第に

難しくなってきたのです。彼らは代わりの安全な生活場を求めていました。

重症のてんかん発作を持つ彼は、重度の障害認定を受けていましたが、父親のきびしい手解きと持ち前の負いん気で、早くから地域で自立生活を始めていました。

ある深夜、彼なりに発作の危険を察知して、父親に電話で助けを求めたことがありません。遠距離に住む父親は、どうすることも出来ず、近くの支援センターへ連絡し、住込みの所長が駆けつけて、その際は事なきを得ました。

そのようなことが繰り返される中で、彼の地域生活を維持させたい父親は、危険を回避させるために、施設型のグループホームの必要性を

彼だけに限らず、独り暮らしの危険と孤独の中にある地域生活者は、他にも多くいました。仲間との暮らしではあっても、職員というつなぎ役を常に持たないグループホーム生活者は、やはり孤立しがちで、くずれやすい。

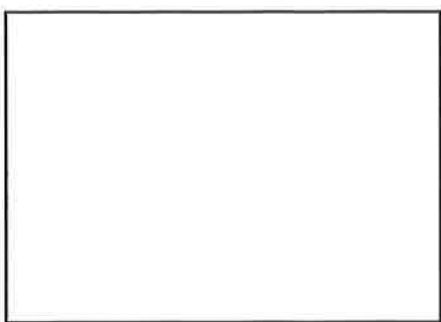
そのような固有の事情が、特異な形のグループホームを生み出しました。(山川)

生活のひとコマ ～忘年会より～

▼「十二月でグループホームの生活も集大成になりま
す。」「グループホームで生
活するのが楽しくなつてき
ました。」「お母さんが死ん
でグループホームに入りま
した。」・・・▼十二月十
日に行ったグループホーム
の忘年会で、今年を振り返
り、そして来年に向けて一
人一言ずつ思いを話しまし
た。今年で四回目の忘年会。
年々グループホームの利用
者は増え、この日の参加者
は入院の為欠席した一人を
除く二十一名。▼日頃の食
事は同じマンションの一室
にある食堂を全員が利用し
ているので、普段からそれ
ぞれ顔を合わせる機会が多
いのですが、この日はその
仲間と「いつもと違った場
所」「いつもと違った食事
を」「いつもと違った雰囲気
で」「いつもと違った・・・」
と、それぞれ個々の感じて
楽しんでいたようです。
▼年のうち数回、行事など
で全体が行動を共にする機
会もありますが、普段は一
人一人が全く違ったそれぞ
れの生活スタイルを持って
います。それは、それぞれ
の一日が違うのは勿論のこ
と、グループホームに生活
の場を移す前の過去や、き
っかけもそうです。▼生活
の場が何処であれ、たとえ
ばグループホームの中の一
室で生活を送るなど、一人
一人が生きていく上で必ず
それぞれの生活の違いは在
り続けます。▼しかし、利
用者の中にはその違いを自
覚し、自分で日々の生活を
作っていくのがまだ、難し
い人もいます。支援者はそ
の場面に立ち入る時、葛藤
やまた発見などの体験をす
るのです。▼今ある利用者
一人一人の生活を、決して
停まることのない生活を、
守っていく支援とは・・・
と、全体の行事、忘年会を
通じて改めて考えさせられ
ました。

(粉田)

職員紹介 「ワークス翔」 かける



野々村真子 ののむらむらこ

体育大学出身の彼女は、
学生時代、陸上の七種競技
の選手でした。「走る、跳ぶ、
投げる」陸上の全てがつま
ったこの競技は決して派手
ではなく、むしろ孤独な戦
いであったと彼女は話しま
す。この経験が、彼女の持
つ強さの源なのかもしれま
せん。
普段はクールな彼女で
すが、「私がこの脚力で全
力疾走して遅刻するわけが
ないでしょ」と朝、駅から
必死でダッシュする姿も1
スポーツマンらしさを感じ

させます。

ユニオン二年目の彼女は
利用者さんの望むように
なるよう支援したいと熱い
想いを持っています。

山崎規生 やまざきのりお

身のこなしの軽さから
一見二十歳台半ばに見えま
すが、実は今年三十五歳に
なるユニオン職員の最古参
の一人です。

大学で経営学を学び、ユ
ニオンで働くまでは、一般
企業の営業職で働く普通の
サラリーマンでした。

いざ、福祉の仕事に就い
てみると自分の中の壁にぶ
つかる毎日だそうです。

そんな彼の今一番つら
いことは、人前で話すこと。
特に、職員会議が終わった
後は、「どうして自分は仕
事が出来ない人間なんだ」と
自己嫌悪で寝られないそ
うです。そんな主人を陰な
がら支える、真紀夫人は、
当法人の居宅支援の有力な
ヘルパーでもあります。

(中谷・荒木)

編集後記

ユニオンのグループホー
ムには、五十代を迎えられた
利用者が数名います。白髪や
手のしわ、どれをとっても長
年、仕事や生活で数々の経験
を積み重ねて生きてこられた
証でもあります。

白髪交じりの頭で、背を丸
くしてポケットに手を突っ込
んで歩く姿は、人生の先輩と
いう尊敬以上に、愛らしさを
感じてしまいます。

ユニオンの授産施設での
利用者は、二十代から五十代
まで幅広くいます。職員は単
に利用者を仕事量や能力で評
価せず、その人の望む形で仕
事が出来るように、そして生
活出来るための工賃を稼げる
ように目指しています。

今号で紹介した「ワークス
翔」でも、この寒風の最中に
ほろつきを持ち、冷水に雑巾を
濡らしながら仕事をしていま
す。また、朝五時に起きて仕
事に行く利用者もいます。

つらい事も多々あると思
いますが、不満一つ言わず懸
念に働く利用者の皆さんには、
頭が下がる思いです。(荒木)